

2021年横浜ナザレン教会・受難節第三主日礼拝

「決して滅びない神殿」

ルカ福音書第21章1節から第21章6節

【聖書】

ルカによる福音書21:1 イエスは目を上げて、金持ちたちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。2そして、ある貧しいやもめがレプトン銅貨二枚を入れるのを見て、3言われた。「確かに言うておくが、この貧しいやもめは、だれよりもたくさん入れた。4あの金持ちたちは皆、有り余る中から献金したが、この人は、乏しい中から持っている生活費を全部入れたからである。」5ある人たちが、神殿が見事な石と奉納物で飾られていることを話していると、イエスは言われた。6「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」

ローマ信徒への手紙 12:1 こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。2あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。3わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。4というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、5わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。6わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、7奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、8勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。

1. エルサレム神殿

壮麗な建築物に目を奪われ心奪われる経験を持つ人は多いのではないのでしょうか。神学生の時、何かのコンサートで東京の初台にある東京オペラシティに行った時、その大きさや煌びやかさに圧倒されました。「人間の力というのは、凄いものだ、こんなに大きくて立派な建物をつくるのだから」と。エルサレム神殿を訪れた人達も、そんな気持ちであったのだと思います。

そのエルサレム神殿を最初に建てたのはダビデ王の後を継いだソロモン王です。七年間を費やし、贅を尽くして造った建造物であったようです。これが第一神殿と言われています。しかし、この第一神殿は、紀元前6世紀に新バビロニア帝国によって徹底的に破壊されて廃墟となり、エルサレムの住民は、バビロンへと囚われて行きました。その後、ペルシア帝国によって新バビロニア帝国が滅び、捕囚された人々のうちの一部が、エルサレムに戻ります。彼らが苦勞しながらようやく再建したのが第二神殿です。第二神殿は、帰還民がやっとの思いで建て上げたもので、第一神殿の壮麗さには及びもつきません。そこで、紀元前37年に即位したヘロデ大王がエルサレム神殿の大規模な改修に乗り出します。ヘロデ大王は、生粋のユダヤ人ではありません。隣国のイドマヤ出身です。当時、ユダヤの国を支配していたのは、ハスモン家でしたが、お家騒動の混乱に乗じたヘロデ大王は跡取り娘と結婚し、ハスモン家を乗っ取り、ローマ帝国の後ろ盾を得て、ユダヤの王となります。彼はクリスマスの幼児殺しで有名なので、教会では極悪人のイメージが強い人です。が、それは晩年のヘロデ大王の姿で、もともとは優れた政治家であったようです。要塞や港などの大規模な土木事業を展開し、経済も発展させ、ヘロデ大王のもとエルサレムは発展していきました。しかし、ユダヤの人々、特に指導者達は、ヘロデ大王がユダヤ人の純粋な血筋ではないと、彼を侮っていたそうです。大王は、そんな指導者達の歡心をかき、自分の支配を強固にする為に、神殿改修を行ったのではないかとされています。その最終的な完成は、紀元後64年、実に80年近くかかった大規模なもので、今日の聖書テキストの時代、ヘロデ大王は既に死んでいましたが、エルサレム神殿はまだ改築中でした。ですが、なんとも皮肉なことですが、エルサレム神殿は、改修が完成してから10年もたたずに、今度はローマ軍によって徹底的に破壊される事となります。

主イエスの目には、このようなエルサレム神殿の将来がはっきりと見えていたでしょう。しかし、人間にはわかりません。巡礼者達は、壮麗な神殿の様子に圧倒され、「この大きな石は、どこそこから切り出して引いてきたものだ」「あの神殿の飾りは、〇〇の手による細工で、△△がささげたものだ、実に見事じゃないか！」と感嘆の声をあげていました。そんな声に主イエスが耳を留め、次のようにおっしゃいます。「あなたがたはこれらの物に見とれているが、一つの石も崩されずに他の石の上に残ることのない日が来る。」神殿がばらばらに破壊される時が来るというのです。

聖書を読んでいて繰り返し思われる事は、私達人間の目は、表面的な所しか見ることができない、という事です。本質的なものを見ることはなかなか難しい。空を覆うほど壮大で、目がくらむほどの煌びやかな建物、どんな

に人の心を圧倒するような壮麗な建造物でも、いつかは崩れ去る、人が造ったもので永遠に存在するものはないのだという事を、私たちは忘れがちです。神を忘れがちなように。ですから、私達は、いつも神のことを想い、見えない本質に目を凝らしていかなければならないのでしょうか。

2. 教会の書

では、今日の聖書テキストが私達に示そうとする本質とは、なんなのでしょうか。真理とはなんなのでしょうか。そう考えると、一つの疑問が湧いてきました。どうして福音書は、寡婦の二レプトンの献金の話しの次に、「壮麗な神殿もいつかは壊れる」という預言を配置したのでしょうか。

新約聖書には福音書は四つありますが、それは、福音書記者が仕える各々の教会に向けてまとめられたものだから、と言われていています。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、彼らの各々の教会に伝わった伝承や断片的な文書をもとに福音書が編集されました。いつの時代もそうですが、最初の教会も人の集まりですから、様々な問題点を抱えていました。教会の指導者でもあったマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネは、自分の教会の問題点に対して神のみ前に額き、御心を求めて徹底的に祈りつつ、主イエスの伝承や断片的資料の中に神の御心を求めてきました。そうして、霊的なインスピレーションを与えられて、主イエスの言葉と行いをまとめてできたのが、福音書だと言われていています。ですから、各福音書は当時の教会の問題点に対する、神の応答だと言うことができます。

そうしますと、今日の聖書テキストの並び、二レプトン銅貨の寡婦の献金の後に、エルサレム神殿崩壊の予告を置いた事にも、ルカの教会にとって何らかの意味があったのです。そうして、人間の本質というのは、この2000年間、大きく変わってはいないので、2000年前の教会の問題点は、形を変えて現代の教会にも潜んでいます。だからこそ、2021年の世界に生きる私達が、聖書の言葉に祈りつつ真摯に耳を傾けることにより、時代を超える神の恵みを受け取ることができるのだと思います。

3. 聖霊が住む神殿

そこで、先週、取次ぎました寡婦の献金の話しを見ていきます。寡婦がくれた二レプトン銅貨は、彼女の生活費全てでした。4節の主イエスの言葉の中で「生活費」と訳されている単語は、「生命」と訳してよいもの。だから、主イエスはここで、「あの寡婦は、彼女の生命をささげた」と仰っています。しかし、彼女自身は、生活費全部なんていう意識はなかったでしょう。そんな事さえ気にならない位に喜びに溢れ、神様に自分を委ねきっていた、と先

週取次ぎました。

このエピソードを味わう内に次の言葉が浮かんできました。今日のもう一つの聖書テキスト ローマ書 12章の次の言葉です。「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」まさに、この寡婦は、自分の手元には何も残さず、自分自身をささげ切る喜びに溢れて、神を神とする正しい礼拝に生きていたのです。

ですが、自分自身を捧げ尽くす、全てを神に委ねる事など自力ではできる事ではありません。しかし、私達にはできないけれども、イエス・キリストならおできになります。十字架と復活の主イエス・キリスト、見えない神の御子の霊、聖霊が私達の内に住んで下さるから、私達でもできる事となるのです。そして、私達が見えない主イエス・キリストの霊、聖霊に自身を委ねる時、その人は神殿となる、と使徒パウロは語っています。「あなたがたは神の神殿であり、神の霊が自分の内に住んでいることを知らないのですか。神の神殿を壊す者がいれば、神はその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたはその神殿なのです。」(Iコリント3:16~17)。

自己中心的に生きざるを得ない者、自分に都合の悪い者はいなくなればいい!とってしまうような私達、敵を愛する事がとても難しい私達。にも拘らず、そんな私達の中に聖霊が下ってきてくださり、私達一人一人が神殿となる為に、主はその身を投げ出してくださいました。私達一人一人は実に尊い存在です、しかし、それは私達が素晴らしいからではなく、神の御子が私達を愛して下さり、命を投げ出して、神の子の命を与えようとしてくださったからこそ、尊いのです。このことを繰り返し受け入れる時、私達は、既に自分が御子イエス・キリストの上に築かれた神殿とされているのだという事を発見します。「知らないのですか。あなたがたの体は、神からいただいた聖霊が宿ってくださる神殿であり、あなたがたはもはや自分自身のものではないのです。」(Iコリント6:19)

4. キリストの体

ですが、この地上に来てくださる御子の霊、聖霊は、不思議なお方。聖霊は、とことん小さくなられます。私達人間が聖霊を裏切ったり無視したりする事ができるほどに小さくなってくださるのです。神は、私達一人一人を深く愛するが故に、聖霊に従うか従わないかの選択を私達に委ねてくださるからです。真実の愛は、相手に自由を与える、自分を殺す自由さえ与えるイエ

ス・キリストの愛だから。そして、聖霊が小さくなって下さるには、別の理由もあるのだと思います。「私達がお互いに尊い者と思い、必要な者と思い、助け合い、励ましあう為に、聖霊は小さくなってくださり、その力を制限してくださっている」と語った神学者がいますが、そのとおりだと思います。聖霊は、霊なる御神、本来なら他者など必要のないお方ですが、敢えて、他者を必要とする「部分」となってくださいます。私達のうち誰かが全体になり、おごり高ぶる事がないように、小さくなってくださるのです。このような聖霊は、まさに私達への愛の故に人なられたキリストのあり方を突き詰めたお方だと言えるでしょう。

だからパウロは、ローマ書 12 章で「わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。」と語っているのだと思います。そうしてキリスト者は、みんなでイエス・キリストの体なる教会を形作っていくのです。だから、私達は誰一人、どんな天才でも、どんなに霊なる人でも、一人で全体となる事はありません。みな、お互いを必要とする「部分」パーツなのです。

しかし、歯車ではありません、他に替えのない部分です。今回の説教準備で、「教会はキリストの体」と言う時、教会をまるでブロックを組み合わせたような、おもちゃの「キリストの体」を思い浮かべていた自分に気づかされました。ある方がキリストの体について、次のように語っているのを読んだからです。「キリストの体、教会に集う一人一人はその部分だ、ということは、一人一人が、かけがえのない臓器や血管、筋肉であり、脳であり、リンパ腺であり、体を形作るかけがえのない一つ一つだ。人間の体は複雑で不思議に満ちており、不要なものなど何も備わっていない。そして簡単には替えが効かない。例えば静脈だけ不要だと引き剥がせば、体は死んでしまうように、教会だってそうだ。誰か一人を欠いても、教会はキリストの体として機能しなくなる」と。

だから、みな欠け替えのない一人一人。今日の礼拝に集められた皆さんの内の誰一人として、「私は教会には不要な人」と思わないで頂きたい。そんな人はいないのです。皆さんの内の誰一人が欠けても横浜ナザレン教会はキリストの体ではなくなります、かけがえのない一人一人です。そんな一人一人が集まり、全てを主イエスに委ねて礼拝する事で、キリストの体を造り上げるのです。父なるみ神によって集められ、自分自身をささげるように礼拝し、助け合い愛し合いつつ、歩む時に出来上がるキリストの体なる教会。それこそ、永遠に滅びない神殿であります。天を仰ぐほどの石も、心奪われる

ような美しい装飾も、いつかは滅び、粉々にされるでしょう。しかし、キリスト・イエスの体なる教会は滅びる事はないのです。

でも、それは本当のことでしょうか。現代の日本の教会は、集う人もほんの僅かであり、社会への強い影響力は持っていないようにも見えます。このままでは滅んでしまうかもしれません。ですが、説教でも度々取り上げる森有正先生は、「人間の罪の問題がある以上、教会はなくなる」と言いました。その通りだと思います。人間に罪がある限り、罪から救ってくださるキリスト・イエスを必要とするからです。そして、教会がそのキリスト・イエスの体であり続ける限り、なくなることはありません。

5. 地上を歩む教会

しかし、その一方で、キリスト・イエスの体としての真実の教会の歩みは、難しい事、簡単ではありません。この地上で肉の体をもって生きている者達が造る共同体ですから、教会に「この世」が入り込むのです。教会の歴史を見てもそれは明らかです。教会の牧師や神父、有力役員が教会を私物化し、自分の気に入らない者を追い出すことが繰り返されてきました。また、この世での名誉や地位ある人、金持ちをもてはやし、小さくされた人、弱くされた人を蔑ろにしてきた事例は、枚挙の暇がありません。私達は、個人としても罪を犯しますが、教会としても罪を犯すのです。

ですが、教会は、いつもキリストの十字架を仰いで礼拝する共同体です。ここに教会にしかない救いがあります、希望があります。信仰者一人一人が罪を犯したと気づかされた時、主イエスの十字架の前に額き、自分を明け渡して悔い改める時、豊かに聖霊が注がれるように、教会も悔い改めて恵みを受ける事ができるのです。神の憐れみに全てを委ねて教会員全員で神様の方に向き直り、自分達の罪咎を申述べ、神に赦しをこうのです。まさに教会が二レプトンの寡婦となる。そうして、教会は新しくされていくのです。成長していくのです。キリストの体の新陳代謝です。

そして、私達は教会の礼拝と交わりを通じて、お互いをキリストに罪赦された者同士、キリストの霊が住んでくださる者同士として知り、大切に思い合う交わりを実践します。教会の礼拝と交わりの中で、神を愛し自分を愛し隣人を愛する事を学んで行くのだと思います。

ですが、この一年、COVID-19の為に、教会活動は制限されてきました。折角、5年ぶりに再開した教会学校も半年で閉じなければならなくなりましたし、三年間続けたバザーも外部に公開しての開催はできなくなり、紫音香伝道師を招いたチャペルコンサート、ナザレン会やハンドベルのコンサート、ギター演奏会も中止を余儀なくされました。政府の新型コロナウイ

ルス感染症対策分科会の尾美会長は、「2021年中の収束は難しい」と国会で答弁しました。あと二年近い辛抱が強いられるようです。

この期間、ただ息を潜めて過ごすのであろうか？何かできる事はないのか、と考えていた時、一つの説教と出会いました。日本キリスト教団山梨教会の及川信先生の2/28の説教です。及川先生は、その説教の中で次のようなことを仰っています。「物事には本質論と方法論がある。本質を見ずに方法論ばかりを考えると、本来の目的からずれた虚しい議論となる。方法論を考えずに本質論ばかりだと、空疎な観念に過ぎなくなる。本質論と方法論があってこそ初めて、具体案が出てくる」と。そのとおりだと思います。

ですが、目的をはっきりと定めなければ、本質論も方法論も考えることができません。そこで、横浜ナザレン教会では、2021年を通じて横浜教会が目指すべき教会のイメージを皆で共有したいと願います。先ず、横浜教会をどういう教会にしたいと考えているか、話し合い、統一した目標を共有します。そして、それを実現する為には、どうしたらいいのか、どのような本質と方法を学ばよいか、話し合い学び合う、そんな自粛期間にしたいと思うのです。「そういうのは牧師が考えてくれ。」とは言わないで頂きたい。牧師はいつかこの教会を去ります。横浜教会は、牧師の教会ではなく、他ならぬ皆さんの教会であり、皆さんは横浜教会に欠かせない部分なので、みなで考えていき、学んでいき、実践していく事こそ大切です。

私達一人一人の内に住んで下さる聖霊は、私達の間にも働いて下さり、私達を十字架のみもとに招き、礼拝させてくださいます。この礼拝の時、主イエス・キリストの十字架の前に額き、全てを父なる御神にささげ、聖霊の住む神殿として再び立て直して頂きたい、新たに作り替えて頂きたい、個人としても共同体としても。そのように、いつも礼拝を通じて新たに改革されていくキリストの体、横浜ナザレン教会でありたいと切に願います。